

文学に現われた図書館と図書館員(1)

滝 沢 正 順

The Library and Librarian in Literature (1), by Masanori Takizawa.

目 次

1. はじめに
 2. 随筆のなかの図書館
 3. 文学作品のなかの図書館
(以下、次々号)
 4. 文学作品のなかの図書館員
- ### 1. はじめに

文学作品のなかには図書館や図書館員のことが出てくるものが時々ある。本稿ではそうした文学作品について述べてみたいと思う。

芸術作品などにあらわれた図書館や図書館員をとりあげる一般的な意味については、以前に、拙稿「劇映画に現れた図書館と図書館員に関する一考察」¹⁾で4つ(または5つ)あげたことがあるが、文学の場合でも同様である。

文学のなかに出てくる事象や人物、記述などを論述や事例研究の材料にするのは、かなり広くおこなわれてきた方法であり、歴史学や法学の、『文学に現はれたる我が国民思想の研究』(津田左右吉)²⁾や、『徳川時代の文学に見えたる私法』(中田薫)³⁾などは、一般によく知られた著作だろうと思われる。図書館の場合にも今までに何度か取り上げられているし、関連文献全体をまとめる必要性もあると思われるので、筆者にわかる範囲のものを参考文献として、本稿の最後に一括して掲げることにする。また、それらの文献から知った作品の一部を、本稿に取入れさせていただいているので、あらかじめおことわりしておく。⁴⁾

さて、文学作品でも、たとえば平安時代の「宇津保物語」には貴族の邸宅の文庫の描写が出てくるが、⁵⁾本稿で

対象とする文学作品はもっと近年に書かれたもので、日本の明治以降と欧米の19世紀以降のものである。

また、作者や内容の関係からふつうは文学としては扱われないが、形式は文学の形をとっているというものがある。たとえば、思想家の大川周明が東京裁判での不起訴が正式に決まるまでの間、病院で「コーラン」を翻訳し、その仕事の終わったときに「古蘭訳註」という詩を書いた。⁶⁾この中には若いときに東京大学図書館に通って回教研究をしたことが回想されていて、同じ時期に東大図書館に通っていた国文学者・俳人の沼波瓊音が図書館や大川周明のことを詠み込んだ短歌も引用されている。しかしこの詩のような作品は通常は文学作品として扱われないので、本稿でも除外することにする。

文学作品には現実の図書館のことが出ていることがある。そうした場合、本稿にもその現実の図書館のことが出てくることになる。しかし本稿では、その現実の図書館について作品中と実際とをくわしく対応させるといった意図は必ずしももっていない。また、作品等の記載内容に実際との相違があるかもしれない場合にも注記等はおこなわない。

図書館や図書館員の出てくる文学作品というと、菊池寛「出世」、阿部知二「旅人」、中野重治「司書の死」といった小説が、比較的良好に知られている。最近のものでは、宮本輝「星々の悲しみ」も図書館が主要な舞台の一つになっている。しかし図書館(員)のあらわれ方は、作品の大きな部分を図書館や図書館員がしめているという場合もあるが、小部分、なかには1~2行の記述があるだけとか、単に図書館という語が出てくるだけというものもある。しかしもちろんこうした量的な相違は、作品の取り上げ方や重要さとは必ずしも比例しない。

ところで、中野重治の「司書の死」には題名に司書という言葉が入っているが、同様に題名に図書館という言葉が入っている作品がある。たとえば、

1988年10月31日受理

たきざわ まさのり 東京大学工学部機械系三学科図書室

May 1989

萩原朔太郎「図書館情調」

宮沢賢治「図書館幻想」

高見順「図書館」

塚原健二郎「子ども図書館」

落合聡三郎「学級図書館」

新田次郎「こども図書館」

入沢康夫「奇妙な図書館群」

高橋睦郎「図書館あるひは紙魚の吐く夢」

村上春樹「図書館奇譚」

E. ネスピット「図書室のなかの町のなかの図書室のなかの町」

ボルヘス「バベルの図書館」

また、野口米次郎「大英博物館の円天井」やデイヴィッド・ロッジ「大英博物館が倒れる」のように特定の図書館名が題名に入っている作品もある。しかしそうした作品で、内容にどの程度図書館が扱われているかは題名だけではもちろんわからない。この点は、「美術館と女たち」(J. アップダイク)⁷⁾とか「田舎教師」(田山花袋)⁸⁾という題名の小説作品に、美術館や学校教師のことがどのくらい書かれているかは、実際にその内容を検討してみないと分からないのと同じことである。

2. 随筆のなかの図書館

2-i.

小説・戯曲・詩歌といった創作された作品でなく、文学作品の作者の書いた随筆や回想などに図書館のことが記されていることがある。これは日常生活などで文学者が図書館と接触する(した)結果書かれたということになる。創作のなかの図書館(員)の前にそうしたものについて見ておくことにする。

文学者と図書館との関わりとして、書かれたものに現れない利用等はもちろんあるだろうし、それ以外にも、

1. 作品等の掲載された単行書や雑誌が図書館に所蔵される

2. 文学者の蔵書や原稿等が図書館に所蔵される

というのがある。これらは通常の図書館の仕事の一部であるが、本稿では除くことにする。

随筆や回想などの場合ですぐ思い浮かべることができ、また、留意されるのは、

(1) 旅行・留学等

(2) 取材・調査

(3) 青少年期の利用

である。

滝沢：文学に現われた図書館と図書館員(1)

旅行の記録のなかに図書館のことが記されているものとして、例えば夏目漱石の「満韓ところどころ」には、大連で日本人の経営する施設の一つである図書館にシェークスピアの全集や漱石自身の著書があることを記している⁹⁾し、斎藤茂吉の昭和5年の旅行の記録である「満州遊記」には、北平(北京)で11月15日に東方文化会の蔵書と国立北平図書館を見学した内容が書かれている。¹⁰⁾また山本太郎の「サハラ放浪」は昭和47年から48年にかけての北アフリカを中心とする旅行記で、このなかにモロッコのタムグルート図書館についての部分がある。¹¹⁾野上弥生子の、昭和17~18年に単行本にまとめられた「欧米の旅」にも図書館の記述がいくつかみられる。2つ例をひくと、大英博物館図書館では、「個人の閲覧室を覗き、その利用法を知った時だけは羨ましかった¹²⁾と記し、また大英博物館でマルクスの「資本論」が書かれたことに言及している。¹³⁾ケンブリッジのセルヴィン・カレッジでは、ロックフェラーの寄付による新しい図書館の内部を見て次のような感想を記している。

費用お構ひなしで完成されてる(図書館の)あらゆる近代設備が、ここで読み、研究するものいかに便利で快適であるかは、十分想像された。同時に私はひそかな疑ひをもたないではゐられなかった。それは、あの中世期の修道院めいた薄暗いカレッジで講義を聴き、苦行僧の小房に似た寄宿舎の部屋に起臥する学生たちが、この図書館のくわつと明るいアメリカ式な建物にやって来て、頭にも眼にも異常を来たさないでゐられるであらうか、といふことである。¹⁴⁾

純粹の紀行や留学の記録でなく創作のなかの場合でも図書館は出てくることがある。水上瀧太郎はイギリス留学中に大英博物館図書館に通った¹⁵⁾が、自分の留学に取材した「倫敦の宿」¹⁶⁾や「霧の都」¹⁷⁾では主人公が大英博物館図書館に通っているし、野口米次郎の詩集「第四表象抒情詩」のなかの「倫敦」の「大英博物館の円天井」¹⁸⁾は大英博物館図書館の天井のドームに上ったの感想を記した散文詩である。また水上瀧太郎はアメリカで知りあった大学図書館の職員が、日本の本で「如何なる部類に属するかわからないのがあるから見てくれ」といって、自分の図書館にある『水戸常盤公園図誌』という本をもってきたことがあると記している。¹⁹⁾

作品の執筆にともなう取材や調査について書いたものの中で図書館の利用や図書館のことにふれる場合として、北杜夫は「楡家の人びと」を書くに際し、「大正七年から物語が始まるので、当時の新聞から調べようとしたが、

図書館界

国会図書館にもなく、私は東大史料編纂所へかなり通って大学ノートに必要なことをメモした²⁰という。また、大正末期からの新聞は国会図書館にあり、私はこれまたずいぶんと通って敗戦の年までのメモをとった。現在のように簡単にゼロックスでコピーできぬ時代であったから、日数がかかった。……時間ギリギリまでねばった。²¹

大原富枝は昭和35年に発表した「婉という女」の主人公(野中兼山の娘)の手紙を、第2次世界大戦中の昭和19年に高知県立図書館で見せてもらうことができたが、この手紙は翌20年、空襲で焼失してしまった。そのため、「めぐり合わせを、わたくしは運命的に考えた」という。²²また別の小説を書くに際しては、国立国会図書館に通って、『大乘院寺社雑事記』を通読したという。²³

新田次郎は「アラスカ物語」の取材で、アラスカ大学図書館を利用したと記しているし、²⁴また、竹山道雄は「ビルマの竖琴」を書くとき、行ったことのないビルマの風土や風俗について困ったという。「近くの図書館で「世界地理風俗大系」を読みましたが、これは簡単にすぎました。暇がないので、遠くの大きな図書館にしらべにゆくことはできませんでした」。²⁵

ほかにも狭義の随筆とはすこし異なるが、後藤明生の「吉野大夫」²⁶のなかにも図書館で調査する部分が出てくるし、森鷗外の「渋江抽斎」にも図書館のことが出てくる。²⁷鷗外は執筆の題材を過去に求めるようになってから、武鑑を調べる必要が生まれたと記している。ところが公開されている図書館では、発行された武鑑を年を逐って集めていない。そのため自分で武鑑を収集することにした。その収集の間に渋江抽斎旧蔵の武鑑にたびたび出会い、中には買い入れたものもある。鷗外が抽斎のことを調べ始めたのは、この武鑑収集からであるというふうに「渋江抽斎」には、なっている。そのほか、これは調査なのか執筆なのか分からないが、津島佑子には大学の図書館に一日こもっている日も多いと書いたものがある。²⁸

これまで例をあげた旅行・留学や取材・調査といった場合のほか、日記や書簡が公開されたり死後に刊行された中に図書館の利用等が記されているといったようなこともある。この例として夏目漱石のイギリス留学中の日記に大英博物館図書館に関する記述があるとか、経済的に余裕のなかった樋口一葉や石川啄木の日記に図書館の利用が記されているとかいったものが知られているようである。²⁹

図書館は今までみたように、取材・調査についての随筆や紀行・日記に、利用や見学の形でいろいろ見出すこ

とができる。これらの場合には、図書館を利用・見学した年月日や日時、資料名などがかなり具体的に書かれていることも多い。それに対し、文学者が自分の青少年期の読書歴や思想形成などについて記した随筆や回想・自伝といったものの中に図書館が出てくる場合には、かなり年月がたってから記録等によらずに回想したりするためか、必ずしも日時や資料名が詳細でないことも多い。

そうした回想等のなかには、自分の図書館の利用歴を何らかの点で系統化して書いた随筆等もある(残念ながら簡単なものが多いが)。そうした系統的な利用歴を記した文章などは、人間形成期である青少年期についての、特定の個人の図書館利用の具体的な事例(の記録)としても貴重であるということができる。(もともと、文学作品の作者、つまり著述家・著述業者にならない一般の人の青少年期の利用形態とは相違があるかもしれないが)。

この例として、図書館の利用についていくつか書いたものがあり、また有名でもあるのは菊池寛である。そこでまず菊池寛についてみてみよう。

2-i i .

菊池寛の青少年期の図書館利用歴を、随筆の「図書館」「アカダンの読書」「半自叙伝」によってみてみることにする。³⁰

菊池寛は

私位図書館に通つた男はないだろう。私は青年時代思ふ通り本が買へなかつたのでその飽くなき読書慾を図書館で充した。私は、半分以上作家としての学問は八分まで、図書館でしたと云つてもいいだろう。³¹

とまでいっている。彼の通つた公共図書館や学校の図書館には「その何れへも自分は百回以上、多いのは二三百回も通つてゐる」。出身地である高松の教育会図書館の開館は、菊池の記憶によれば、彼が中学3年の明治39年であるという。1月券が5銭の低額であり、その1月券の第1号を買つたのは菊池であるという。この図書館の出来たことは「私の中学校時代に、もっとも有がたい事」であつたと書いている。

明治41年に上京してからは、帝国図書館、大橋図書館、日比谷図書館に通つて、書名だけ知つていて読みたかつた「多くの本をむさぼり読んだ」。東京についた翌日にはすでに帝国図書館に行って「その無尽蔵な蔵書」に「大歓喜の情」を感じている。東京では何物にも感心しなかつたが図書館にだけは十分驚きまた満足したと述べてい

る。

また明治43年だったかには、『時事（新報？）』の学生欄に「三大図書館比較評」という文を投書して、前記の東京の3図書館の得失を論じたという。

明治43年の『時事新報』をみると、たとえば2月23日の第7面には日比谷図書館がいつも満員だという記事があり、3月5日の第7面にも図書館の利用が盛況だとして帝国図書館の例が載っている。菊池寛もこれらの多くの利用者の一人だったわけである。

菊池寛は東京で、東京高等師範学校や第一高等学校などいくつかの学校に入学するが、これらの学校のうち、一時在学した早稲田大学図書館では、長い間読みたいと思っていた西鶴全集を読めたことを「忘れられないこと」であるといっている。帝国図書館では西鶴全集は「禁閲同様に、ただ空しく垂涎せしむるだけであった」。

第一高等学校に学んだあと、菊池寛は京都大学英文科に入学する。京都では大学の研究室にあった「英語で読める戯曲は大抵読んだ」が、「岡崎の図書館へも私は二三百回通つたべらう」。京都へ行って一番に行ったのはこの京都府立図書館であったという。菊池寛は大阪・奈良・岡山などはゆっくり逗留したことはないが、それでも図書館へだけは顔出しをしていると書いている。

こうした菊池寛の図書館通いの経験から生まれた小説がよく知られた「出世」³²である。

「出世」の主人公は讓吉となっているが、ほぼ作者自身と考えてよさそうである。「半自叙伝」「図書館」には「出世」に書かれたことが、菊池自身の経験として出ている。「出世」は、地方から東京に出て図書館をよく利用した学生生活を送った讓吉の回想と、生活に余裕のできた現在とを対比させた小説である。彼は大学卒業後に経済的理由から始めた翻訳の原書をなくしてしまい、帝国図書館でやっと同じ本を見つけて翻訳を続けたりしたこともある。そしてかつて帝国図書館に通ったときの顔なじみである下足番のひとりが、現在は閲覧券売り場へと「出世」しているのに出会ってうれしく思う。

ところで菊池寛の図書館利用の内容であるが、彼が図書館へ行ったのは「貧乏で本が買へなかつたから、本は図書館で読む外はなかつた」からである。図書館通いは彼の学生生活における「娯楽、消閑」であった。また菊池寛の図書館での読書は「乱読」であって、系統的には読まなかったと自分で述べている。「文学歴史を中心として、雑書を漁つてゐた。殊に徳川時代の随筆雑書を貪り読んだ」という。また「興味中心の気まぐれで手當り次第に雑書を読むのである」とも書いている。

しかし「半生を学校へ通うよりはもっと熱心に図書館へ通った男」と自認する菊池寛も、学校生活から離れては図書館の利用は激減したようである。大正13年に発表の「図書館」の末尾は次のようである。

私の半生のレゾートであり慰安所であり勉強所であった図書館へも、この頃は年に一度か二度か、それも止むを得ない必要で、やつて行く丈である。³³

また、図書館をひんぱんに利用した菊池寛も、組織立った図書館についての意見は必ずしももたなかったような印象を受ける。たとえば図書館通いがすでにかなり昔のことになった昭和13年5月の「話の屑籠」(雑誌『文藝春秋』掲載)には、当時の日比谷図書館の閉鎖問題³⁴に関連して、東京の図書館についての菊池の意見が述べられている。³⁵短い文だが、要旨は、“図書館へ来るのは受験生だけであり、職業をもった一般の東京市民はめったに図書館へは来ない、したがって蔵書閲覧の図書館は帝国図書館だけで沢山であり、そのほかの図書館は参考書と明るく気持ちのよい閲覧室を広くとった勉強図書館にすべきだと思う”といったものである。

この菊池寛の意見についての図書館界からの反応としては、たとえば竹林熊彦が「菊池寛氏ノ論議」を『園研究』に載せている。³⁶

2-iii.

菊池寛以外にも図書館の利用歴・利用経験を回想した随筆類を書いた人はいろいろいる。实例をあげていってみることにしよう。(青少年期をすぎてからの利用の回想も一部まじる)。

まず、いくつかの図書館の利用を、多少とも整理した形で系統化して記したものをあげてみよう。

辻邦生は自分の図書館利用歴を回想した「図書館への郷愁」³⁷で、少年時代に利用した東京市内の氷川図書館の児童閲覧室、中学のとき通った大橋図書館、大学生として在学した東京大学図書館、フランスに留学していたときのソルボンヌ大学付属図書館、「本格的に通ってその蔵書のお蔭を蒙った」パリの国立図書館についてそれぞれ思い出を述べている。

また、柏原兵三は「図書館と私」³⁸で、図書館利用歴を回顧している。小学校(国民学校)では図書館・室がなかったなのでその恩恵を受けなかったが、海野十三の海洋小説や高垣眸の冒険小説などの面白さに開眼した友人たちと私設図書室を開設したという。中学には同窓会の寄付した立派な図書館があったが、あまり利用した記憶が

図書館界

なく、大学時代は大学の図書館をかなり利用し、また近所にある区立図書館も利用したという。ほかにも西ベルリンのベルリン自由大学やアメリカの町立図書館のことも記している。

木下柰太郎は「本・図書館」³⁹で、東大図書館と帝国図書館、それに米英仏などでの図書館利用を回想しているし、吉屋信子は「図書館のこと」⁴⁰で、東京の日比谷図書館・帝国図書館・大橋図書館の利用について書いている。

宮本百合子の「図書館」⁴¹は、複数の図書館でなく、帝国図書館についての三十年近い間の利用の回想である。

今まであげた例はどれも多少とも系統化して述べられたものである。

系統的な回想でなくても、図書館についての思い出を述べたものはいろいろある。多くは、読書歴等を述べるさいに断片的に図書館の利用経験等にふれたものである。いくつかあげていってみよう。

佐多稲子は「本との出会い」のなかで、子供時代、帰郷した叔父（大学生）につれられて長崎市の図書館へ行ったことを記している。⁴²このときは小学校へ入学する以前で入館資格はなかったが、特別に図書館事務員の部屋に入れてくれ、桃太郎の絵本を与えられた。このときの感じは鮮明に残ったという。

伊藤藤は「自伝的スケッチ」に、小樽図書館と小樽高等商業学校図書館のことを書き、⁴³後者のことは、自伝的小説「若い詩人の肖像」でもふれている。⁴⁴そこでは、同窓で、やはり同校図書館を利用した小林多喜二についても書いている。

大庭みな子はアメリカ在任時代の町の図書館のことを書いているし、⁴⁵林芙美子は尾道の市立女学校の図書室のことや帝国図書館のことを回想している。⁴⁶宮本百合子も先の帝国図書館以外にも、女学校4年になって女学校の図書館を使ったと書いている。⁴⁷網野菊は大橋図書館の、⁴⁸田山花袋は帝国図書館の利用を、⁴⁹それぞれ記している。新田次郎は中学のとき利用した公共図書館のことを書き、⁵⁰赤川次郎は中学の図書館で、自分の家から持っていった本を読んだことを書いている。⁵¹黒井千次は高校の図書室の窓からプラタナスの木を眺めたといひ、⁵²後藤明生は高校のとき、書店では新刊の本を眺めるだけで、読むのは高校の図書館か町の図書館か町の貸本屋で借りて読んだという。⁵³宮本輝は学校の図書館で小説を読みあさったり、18才のとき大阪の中之島図書館に通ってロシア文学とフランス文学を読んだというし、⁵⁴津島佑子はカトリックの女子校の図書室で、キリスト教関係の本を借りて読んだという。⁵⁵

あるいはまた、江戸川乱歩は早稲田大学の学生時代、講義はあまり聴かず、「早大図書館卒業という方がふさわしいような勉強の仕方」だったという。⁵⁶そして、「貧乏書生には図書館のほかに（本を）頼るところはない」ため、早大図書館のほかに、帝国図書館・日比谷図書館・大橋図書館によく通ったという。⁵⁷

五木寛之は中学2年の頃の「夏休みに、図書館の本棚を左から右へ百冊読破しようと試みた」というし、⁵⁸高橋和巳は大学時代に図書館の本を「アイウエオ順に自棄くそに読んでいったことがある」という。⁵⁹花田清輝は20才前半の4・5年間は「学校の図書館にとじこもって手あたりしだい乱読した」という。⁶⁰小松左京も高校時代、第三高等学校の「図書館にこもってとにかく手あたり次第に読んだ」という。⁶¹

日本以外でも、たとえば、劇作家のT.ウィリアムズは24才の夏に大学図書館か公共図書館を使ったと書いているし、⁶²動物の小説で知られるシートン⁶³や詩人のランボー⁶⁴は大英博物館図書館に通った。大英博物館図書館に関しては利用したことで有名な人が何人もいようだが、デイヴィッド・ロッジの小説「大英博物館が倒れる」には、登場人物たちの会話に、大英博物館図書館に通ったことで知られる人の名をあげていくところがあり、マルクス、ラスキン、カーライル、コリン・ウィルソン、チェスタトン、バロックの名が出ている。⁶⁵

青少年期についてすこし例が多くなったが、この種の断片的な言及・回想はおそらく極めて多数あることだろう。本人の書いた文章そのものは見出しにくくても、その文学者の年譜などがある場合には、図書館利用が記載されているのがしばしば見つかる。

図書館の利用歴・利用経験についてふれた随筆・回想では、たいてい場合、たんに図書館を利用した（あるいは利用しなかった）ということが書かれているのに留まっていることが多いようである。何度も通ったとか、何何の資料を利用した（利用できた）、あるいは図書館はあったが利用しなかった、というふうな記載である。これは、断片的なものでも、多少とも系統化して書かれたものでもだいたい同様である。

こうした回想のなかには、歴史的な記録としての意味で貴重なものもあるだろうし、図書館（員）についての感想や、利用者の考えを知るという点で注意すべきものも見受けられるかもしれない。しかし一般化していえば、図書館について、利用者としての立場から部分的にふれるということが多く、ひんばんに利用した人の場合であっても（菊池寛がある程度そうであったように）、図書館

May 1989

のあり方にまで論及することは、通常はあまりないようである。

もちろん、感想なら例はあり、吉村昭「図書館⁶⁶」には図書館の職員や施設についての感想が述べられているし、井上ひさしの「本の枕草紙」のなかの「図書館ざらい⁶⁷」には、図書館への不満（冗談の部分もある）が述べられている。また、ルポルタージュ（たとえば福田恆存に赤坂時代の国立国会図書館をルポしたという「国立国会図書館」があるという⁶⁸）のようなものになれば、たんなる利用経験とは別の視野が必要になるだろう。

随筆では今まで見たケースのほかにも、書かれる内容にいろいろなケースがありうる。例を1つあげれば、比喩的に図書館のことや図書館という語を出す場合がある。庄野潤三は「本の置き場所」と題した随筆で、家の2階に本を置いてあると述べ、その2階を小さな図書館であるとしてそこに空想上の貸出係が勤務することを仮に想定している。⁶⁹また、梅崎春生は子供のとき、西日本新聞の前身のひとつである福岡日日新聞（略して福日）に勤める人から童話の本を借りたことを記した文を「福日図書館」と題している。⁷⁰そのほか寺山修司は、さまざまな不思議な内容の本についての随筆集のタイトルを「不思議図書館」「幻想図書館」と名付け、前者の後書きでは自分のことを「不思議図書館司書」と記している。⁷¹もっともタイトルについては、寺山修司自身でなく編集者の発案であるかもしれないが。

随筆に見られる図書館（ないしは図書館にふれた随筆）は、いろいろな形態があるということがわかる。ところで、文学者と図書館との関わりという点で、これまで随筆についてみたのとは別の種類の、やや特殊なケースをひとつみておかなければならない。それは文学者で図書館に勤めたり、館長等をしたという経歴をもつ人たちのことである。

2 - iv .

経済的理由や社会的活動の一部などとして、図書館で働いたり図書館に関係したという文学者は何人もいる。

そして作品のなかにその経験が直接あらわれているものもある。

ストリンドベリは、1874年から1882年まで8年間、ストックホルムのスウェーデン王立図書館につとめていたが、自伝的な小説「痴人の告白」の本文の冒頭はこの図書館の描写から始まっている。そして主人公は上演の見込みのない自作の戯曲の原稿をかかえ、また図書館での

滝沢：文学に現われた図書館と図書館員(1) 昇進の見込みも少ないため厭世思想にかぶれていったと書かれている。⁷²

洪川驍の「柴笛詩集⁷³」は昭和19年から20年にかけて書かれた10篇の散文詩から成っているが、このなかには、公共図書館を利用したときのエピソードの書かれた「少年」などととも、作者の勤務していた大学図書館でのことと思われる「日曜日」「友」がふくまれている。

島尾敏雄の「日の移ろい」「続・日の移ろい⁷⁴」に書かれている図書館も、作者が分館長をしていた県立図書館分館のことと考えてよさそうである。

阿刀田高は図書館に11年間在職していたというが、図書館をやめて文筆専業になってから、はじめて小説を書いたときには、「自分がよく知り、得意なことを書くのが一番と、図書館を題材にと」ったという。⁷⁵

創作でなく随筆に回想が書かれていることももちろんあり、たとえば葉山嘉樹は工学系の専門学校の図書室で、「私はただ、本の表題だけタイプライターで叩けばよかつたので、大きな図書室に、……図書館長見たいに気取つて、回転椅子の上にフンゾリかへつて」いたという。⁷⁶

また、農民のための図書館をつくったというノルウェーの詩人ヴェルゲラン⁷⁷のような場合もあるし、図書館で働く希望や勧めがあったが、実際には図書館に勤めなかった例もある。

たとえば夏目漱石は正岡子規にあてた書簡のなかで、教師がいやになったので帝国図書館に勤めたいと考えたことがあったことを書いているし、⁷⁸フランスのポーヴォワールも回想録「娘時代」のなかに、(いくつかの図書館利用とともに)、将来の職業として図書館員を父親に希望され、母親と一緒にソルボンヌ大学の図書館員に意見を聞きにいったことを記している。⁷⁹林真理子もエッセーの中で、子供時代に母親から、将来は司書になるようにといわれた経験を書いている。⁸⁰

文学者で図書館員というのは、純然たる創作のなかにも例がある。たとえば、辻邦生の小説（童話）「ユリアと魔法の都⁸¹」のなかには市立図書館で働く小説家が出てくるし、阿部知二「旅人⁸²」の中の仁礼という大学図書館に勤める青年も小説家になる。また実際に図書館で働くことはないが、田山花袋の「蒲団」には、小説家志望の女性が、上野の帝国図書館で見た女の見習生が入用だという広告に応募して働こうと思うと、師事している小説家に対して手紙のなかで述べている。⁸³

3. 文学作品のなかの図書館

3-i.

文学作品には現実に存在する図書館が出てくることがあることは「はじめに」で書いたし、今まで述べたなかにもすでに一部そういう例が出てきた。文学作品に図書館が出てくるのは、作品の設定や物語の叙述の必要上のこともあるだろうし、作品の主題に関係している場合もあるだろう。しかし作者と同時代の、現実に存在する(した)図書館が出てくる場合には、その実際の図書館について、作者が知識や伝聞としてしか知らないということは少ないように思われる。(すくなくとも作者と同じ国の同時代の実際の図書館が出ている場合には)。よほど実際と異なる書かれ方がされているのでないかぎり、何らかの形で作者はその図書館について、現実に利用等で経験したり見聞していると考えてよいのではないかと思われる。

たとえば、作者が在学したり関係した現実の学校の図書館が作品のなかに出てくることがある。その作品がまったく虚構の内容であった場合でも、作品のなかのそうした学校の図書館は、実際と同じか、少なくとも、ありうる(ありえた)形で書かれているようである。

例を大学図書館にとってみよう。

日本の大学のなかには、目だって多い数の文学者がその大学の出身であるとか、教職員として在職したという大学がいくつかある。そうした大学のひとつであり、日本の大学のなかで最大規模の蔵書数をもつ大学のひとつでもある、東京大学の図書館について作品をあげてみることにする。

東大の図書館のことが書かれた文学作品としてよく知られているものに、夏目漱石の「三四郎」⁸⁴がある。主人公は東京帝大の文科大学生だが、図書館のなかにはじめて入った時のことはこんなふうに書かれている。

……図書館に這入った。広く、長く、天井が高く、左右に窓の沢山ある建物であつた。書庫は入口しか見えない。此方の正面から覗くと奥には、書物がいくらでも備へ付けてある様に思はれる。立つて見ると、書庫の中から、厚い本を二三冊抱て、出口へ来て左へ折れて行くものがある。職員閲覧室へ行く人である。中には必要の本を書棚から取り卸して、胸一杯にひろげて、立ちながら調べてゐる人もある。三四郎は羨やましくなつた。……/三四郎は一年生だから書庫へ這入る権利がない。仕方なしに、大き

な箱入りの札目録を、こぶんで一枚々々調べて行くと、いくら捲つても後から新しい本の名が出て来る。仕舞に肩が痛くなつた。⁸⁵

「三四郎」に出てくる図書館の建物は明治25年に竣工したもののだが、芥川龍之介の「路上」の冒頭の部分に出てくる図書館も、⁸⁶この建物にあった時期の東大図書館のようである。

この建物は、大正12年の関東大震災のとき蔵書とともに焼失したが、久米正雄の作品集「学生時代」のなかの「万年大学生」では、「まだ震災の残骸が、それから一年以上は経つたけれども、ことごとく取り除けてない時分に」「医科の教室や図書館が、焼けたり崩れたりした跡は、それでも煉瓦壁はすっかり取毀つて、一隅に順序よく積み重ねられ、その向うに巨大な足場がかりなぞができて、再築しかかっている様子」の東大構内を作者たちが歩いている。⁸⁷

第一高等学校は、東京大学予備門が第一高等学校になり、さらに第一高等学校になったものだが、同じ久米正雄の作品集「学生時代」のなかの「艶書」は、東京・本郷にあった時期の第一高等学校の寮生たちの話であり、この寮生のなかには図書館で勉強する習慣の一高生がいる。⁸⁸また、芥川龍之介の「大導師信輔の半生」には、主人公が利用した図書館として、帝国図書館・大橋図書館とともに大学と高校の図書館があげられている⁸⁹が、これは東京帝大と第一高等学校の図書館と思われる。

第一高等学校は、第2次世界大戦後の新制大学発足のさいには、東京高等学校とともに東京大学教養学部になった。この東京大学教養学部図書館のことが、大江健三郎の「新しい人よ眼ざめよ」⁹⁰のなかの「怒りの大気に冷たい嬰兒が立ちあがって」に出てくる。作中の「僕」がウィリアム・ブレイクの詩をはじめて読んだのは、同図書館のなかでのことである。

……躑躅を多様に集めていることで植物学的に意義のある場所なのらしい構内の、旧一高以来の図書館で、僕はたまたまその一節を読んだ。……/僕がこの詩句を見出したのは固表紙の大判の本で、僕の坐った席のとなりに、それは置かれていた。……/いったん坐った椅子から腰を浮かすようにして、僕は開かれたページを覗きこみ、……読み進んだ。そしてききに訳出した詩句に出会い、いま新しく展開したばかりの自分の生について、決定的な予言をあたえられたように感じたのである。⁹¹

特定の時期について作品がいくつかみつかることもありうる。断片的なものばかりだが、昭和10年代から20年

代前半の東京大学附属図書館（現在の総合図書館）の出てくる例を3つあげてみよう。ちょうど太平洋戦争とその前後だが、かならずしも戦争に関係しているとは限らない。

野上弥生子の場合、東大に直接関係あったのは本人自身ではないが、「迷路」は昭和10年の大学祭（五月祭）が冒頭の場面になっていて、そこには法医学教室の陳列室の見物人の列が、図書館のあたりまでえんえんと延びているという文章がある。⁹²

前にあげた渋川驍の「柴笛詩集」⁹³は、すでに記したように昭和19年から20年にかけて書かれた10篇の散文詩から成り、そのなかに、東大図書館の宿直室での生活のことと思われる「日曜日」「友」がある。

三島由紀夫の「青の時代」⁹⁴では、主要人物の一人の若い女性が、昭和20年ころ東大図書館に勤めている。作中人物の言葉によれば彼女が勤めたのは徴用のがれのためであり、終戦直後の図書館の屋上ではじめて彼女に会った主人公（法学部の学生）は、「図書貸出係」の彼女に会うため、図書館に通っている。

このように、在学・在職などで関係のあった現実の学校の図書館が作品に出て来るのには、作品の必要上ということとを別にすれば、作者自身にとって書きやすいということも、ひょっとするとあるのかもしれない。利用した経験があったり、すくなくとも書くに必要な点について推測がつくために、作品のなかに出しやすいというふうである。しかしこれは憶測としていえるだけである。

3-i i .

作者の経験したり見聞したことが作品にあらわれるのは、もちろん学校や大学の図書館には限られない。また、経験や見聞がそのままのかたちで作品にでてくるとも限らない。

館種を気にせずに作品の例をあげていってみることにしよう。作者の経験や見聞が比較的そのまま現われたと思われる例からまずあげていってみる。

齊藤茂吉には、昭和16年に帝国図書館の出納手を詠んだ「図書館の出納をする少年がきびきびとしてゐたるうれしき」という短歌があるというし、⁹⁵前田夕暮の歌集「陰影」には

韓人の教科書書きに通ひたる図書館のせらに食ひしかたばん

とろとろと瓦斯の灯ともる図書館のせらの隅にて眠り

を思ふ

という歌がある。⁹⁶これらは作者の経験に基づく点が比較的大きい作品だろうという印象を受ける。前に「随筆のなかの図書館」でふれた作品、たとえば野口米次郎「大英博物館の円天井」⁹⁷や菊池寛「出世」⁹⁸も、この点で同様に考えられる作品である。

こうした作品に対して、作者の経験と同時に主観性の加わったものもある。たとえば菱山修三の詩集「懸崖」のなかの「冬至」⁹⁹では図書館の壁にストーブの煙突のための筒穴をあけることが出ているのだが、同じ詩集のなかの「炎天」¹⁰⁰では人間の感じる暑さが図書館にも仮託されて図書館の煉瓦塀が汗をかいている。

しかし主観性があっても、その形態はいろいろである。たとえば宮沢賢治の「図書館幻想」¹⁰¹やこれを詩に改作したものの¹⁰²は、図書館のなかでの人との出会い、もしくは別れを書いているが、図書館そのものはあいまいな書かれ方である。また、松浦寿輝の詩「休暇」¹⁰³は図書室のなかで読書する人物を書いているが、富永太郎の詩「深夜の道士」¹⁰⁴では、本のたくさんある図書室と夜そのなかにいる人物をたいへん情緒的に書いている。もっとも本がたくさんある中にいる人物を情緒的に書くというのは、図書館でなくてもあり、日夏耿之介の詩集「黒衣聖母」のなかの「浴船」¹⁰⁵は、本のたくさんある夜の書斎のなかの人物を書いている、冒頭の部分は「深夜の道士」と似た印象を受ける。

図書館の意味が関係している場合や、図書館への批評によってできている作品もある。草野心平の詩集「日本沙漠」のなかの「東京公園」¹⁰⁶では、理想的な都市の情景の一部として、美術館や運動場とともに図書館が出ているし、小熊秀雄「流民詩集」のなかの「日本の憂愁」では、図書館は「勉強」するところである。¹⁰⁷萩原朔太郎「新しき欲情」のなかの「図書館情調」¹⁰⁸は、「ドイツ式図書館」と「アメリカ式図書館」という2つのイメージを対比させた、図書館についての批評である。入沢康夫の詩「奇妙な図書館群」¹⁰⁹と高橋睦郎の詩「図書館あるひは紙魚の吐く夢」¹¹⁰も、図書館をめぐるいくつかの寓話が述べられている。

今までの例は、どれも、作者の経験や主観、図書館の意味や批評といったものがあつた上での作品だが、なかには、西脇順三郎の詩集「近代の寓話」のなかの「修辞学」のように、前後の脈絡もなしに突然、図書館という語が出てくる¹¹¹ようなものもある。

おもに短歌や詩によってみてきたが、小説や戯曲の場合にも基本的な相違はないと思われる。経験や見聞をは

図書館界

はじめとする、さまざまな要素が作品には見出せるわけである。また、作品の内容や出てくる図書館がまったく虚構の場合でも、作者が実際に経験した図書館の印象はおそらく何らかの形で作品に反映されているだろうと思われる。

経験という点では、現実には存在しないような経験のしようのない図書館も文学作品には出てくる。ここからは日本だけでなく欧米の作品も一緒にみていくことにしよう。

辻邦生「ユリアと魔法の都」¹¹³や天沢退二郎「光車よ、まわれ！」¹¹⁴は、どちらも児童向けの物語だが、物語そのものも、出てくる図書館も、かなり空想性の強い実際からは離れた内容をもっている。しかしそういった点では大人の読者が対象のものでも同様の場合がある。アナトール・フランスの「天使の反逆」¹¹⁵では、出てくる図書館そのものは実際にありうる図書館だが、夜中に図書館のなかで多くの本がひとりで移動してしまう（キリスト教の「天使」が犯人だったのがあとでわかる）。ボルヘスの「バベルの図書館」¹¹⁶は図書館そのものがかなり奇妙であるし、中島敦「文字禍」¹¹⁷では古代アッシリアのニネヴェの図書館が出てきて、書物（楔形文字の記された粘土板の瓦）とともに文字の精霊が実在する（？）という話である。E. ネスピットの「図書室のなかの町のなかの図書室のなかの町」¹¹⁸やG. マクドナルドの「リリス」¹¹⁹、村上春樹の「図書館奇譚」¹²⁰も現実離れのした内容である。

現実離れという点では、未来の架空の世界の出来事を描いた作品も現実離れしているわけだが、そうした作品に図書館が出てくるものとして、たとえばP. C. ヤシルドの「洪水のあと」¹²¹がある。

現実離れした（点のある）作品には、ファンタジーそのものが中心になっている作品もあるし、中島敦「文字禍」のように、寓意等をあらわす必要から現実離れしたように思われるものなどもある。いずれにしろこれらの作品に出てくる図書館は、作品の設定や主題、叙述・物語などが現実離れしているために、それにともなって現実離れした（点をもつ）ているものである。しかし現実離れした（点のある）作品であっても、作者が実際に経験したであろういろいろな図書館の印象は、おそらく作品のどこかに反映されているだろうと思われる。もっとも、寓意的な点があるように思われても、必ずしも現実離れしていないものもあり、図書館に関するもので、ピクトル・ユゴー「九十三年」¹²²には、貴族の城館の図書室で、本の価値や意味とはまだ無縁な幼い子供たちが、貴重本のページを全部破り取ってしまうという挿話がある。

文学作品に現われる図書館は、作品の設定や主題、叙述・物語の必要などの関係で出てくるわけであるが、そこには作者自身の図書館についての経験や見聞が何らかの形で反映されているように思われる。また、作者の主観や図書館の意味・批評といったものも関係してくる。そしてそうしたものの関係のしかたには、以上みてきたようにいろいろな類型（もしくは段階）がみられる。

3 - iii.

さて、作者の経験や作品に関連する要素という点からは一応離れて、こんどは、図書館の利用の出てくる文学作品をあげていってみることにしたいと思う。（もちろん今まであげた作品のなかにも図書館の利用の出てくる作品はあるわけであるが）。

もっとも、利用といっても、閲覧や貸出でない利用も見出せるし、図書館の建物が出てくるだけということもある。たとえば三田誠広の「僕って何」は、主人公が薦のびっしりからみついた大学図書館の傍らにるところから始まっているし、¹²³ 芥川竜之介の「父」では中学校の図書室が追悼式の会場に、¹²⁴ 三浦朱門の「団地小学校」では小学校の図書室が文化祭の会場準備で、¹²⁵ それぞれ出てくる。しかし閲覧や貸出などの形の図書館の利用も多くの文学作品中に見出すことができる。

たとえば、デイヴィッド・ロッジ「大英博物館が倒れる」¹²⁶は、大英博物館図書館に通って博士論文を執筆している大学院生が主人公である。彼は毎日、大英博物館図書館に行くが、博物館の方には全然行っていない（エルギン・マーブルスすらゆっくり見ていない）。けれども博士論文はなかなか出来上りそうもない。

彼は大英博物館図書館の書庫のなかにまぎれこんでさまよったり、マルクスが「資本論」を書いた席が自分の席になったり、大英博物館に火事（？）騒ぎがあったりといろいろな経験をする。またこの小説では各章のはじめの部分に、大英博物館図書館のことが出てくる文学作品や、文学者の文章の一部がいくつか引用されているが、この小説の主人公のように、図書館に通う人物は文学にときどき出てくる。

たとえば高見順の「図書館」¹²⁷には、帝国図書館に行く左翼活動をする大学生と、同館に常連の利用者として通う人たちが出てくる。また、宮本輝「星々の悲しみ」¹²⁸では、大学受験のための「浪人」をしている18才の予備校生が、大阪の中之島図書館に通って（受験勉強でなく）多くのロシア文学とフランス文学を読む。谷崎潤一郎の

「ハッサン・カンの妖術」¹²⁸では、作者自身と思われる(ように書かれた)語り手は、幻術を使うインド人と帝国図書館の目録室で何度も顔をあわせ、洋書目録の同じカードボックスを2人が同時に調べようとしてはじめて話をするようになる。ウィリアム・ブローマーには、大英博物館の読書室に通う人物について書いた「読書室の入場券」という詩があるようだし、¹²⁹ネルヴァルの作品集「火の娘たち」に入っている「アンジェリック」¹³⁰のなかでは、作者が図書館や文書館をいくつか巡っている。

しかし図書館に通うといっても、現実逃避的な利用も出てくる。(宮本輝「星々の悲しみ」の少年も半分は逃避である)。北杜夫の「楡家の人びと」の終わりの部分では、第2次世界大戦の日本の敗戦で虚脱して生活の意欲を見失った少年が、(家族には図書館で勉強するといつて家を出るが)、図書館では逃避的に推理小説ばかり読んでいる。¹³¹

利用の内容はさまざまだとしても、図書館の利用の出でくる作品は多くある。もうすこしあげていってみよう。

大学図書館では、たとえば、石川達三の「青春の蹉跎」¹³²では、大学紛争でゆれるキャンパスで、司法試験を受験する大学生が大学図書館で勉強しているし、アーウィン・ショーの「賢く公正なるものすべて伝わるどころ」¹³³でも大学図書館を利用する大学生が出てくる。高橋たか子の「誘惑者」には、主人公である京都大学の女子学生が、文学部の図書閲覧室で目録カードを引いて、本を借りようとする部分があるし、¹³⁴宇野浩二の「蔵の中」では、主人公が卒業後に自分の母校の図書館の図書室に入ったという文がある。¹³⁵

また、公共図書館では、作者と題名だけあげてみると、ジャック・ロンドン「マーティン・イーデン」¹³⁶、ヘンリー・ミラー「ネクサス」¹³⁷、ジェームス・ジョイス「ユリシーズ」¹³⁸、J.P.サルトル「嘔吐」¹³⁹、トルーマン・カポーティ「ティファニーで朝食を」¹⁴⁰、バーナード・マラマッド「アシスタント」¹⁴¹、アントニー・バージェス「時計じかけのオレンジ」¹⁴²、パステルナーク「ドクトル・ジバゴ」¹⁴³、日本でもたとえば村上春樹の「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」¹⁴⁴といった作品で、主人公たちが図書館を利用したり、すくなくとも図書館のなかに入る部分がある。永井龍男の「コチャパンバ行き」にも、会話のなかに、週に1回老人ホームから公共図書館に行く老人の挿話が出てくる。¹⁴⁵

文学作品のなかで図書館が利用される理由は、基本的には、実際に図書館が利用される場合の理由と同じである。つまり趣味や教養のために本を読んだり借りのため

であり、勉強や調査、研究などのためである。実際と文学作品との図書館の利用を対比するという事は、方法と内容によっては興味深いものになる可能性は十分にあるだろうと思われる。また、文学作品に出てくる図書館の利用を類別化したり共通点をさがして、利用に関する内容を検討するという事もできるとと思われる。しかし、おそらくかなり多くの文学作品に図書館の利用をみつけることができるだろうと思われるので、本稿では、とりあえずそうした検討はおこなわない。

さて、図書館の出でくる文学作品の例を今まであげた以外にももう少し見ておいてみることにする。

由起しげ子の「本の話」¹⁴⁶は、亡くなった法学者の蔵書を、まとまった形で売るために奔走する話で、保険会社の書庫が出てきたりする。森鷗外の「妄想」では主人公が、所蔵している学術雑誌のバックナンバー数千巻のほとんどを官立学校に寄付したという部分や、ドイツに留学していた主人公が、日本に帰るとき、遠く足を運ばずに大学図書館で本については大抵まにあう留学先から帰国するのが惜しかったという部分がある。¹⁴⁷幸田露伴の「観画談」には、苦学して大学に入学した主人公が豊富な図書館で勉強できるのをうれしく思ったという文があるし、¹⁴⁸松本清張の「西郷札」には、新聞社主催の展覧会の出品資料の蒐集をした中に大学図書館が入っていたり、図書館にこもって明治初期の新聞記事をさがすところがある。¹⁴⁹塚原健二郎の「子ども図書館」¹⁵⁰は、小学生たちのつくった小さな図書館の話であり、落合聡三郎の「学級図書館」¹⁵¹は小学校の学級文庫に関する戯曲である。バーナード・マラマッドの作品集「魔法の樽」のなかの「夏の読書」では高校を中退した少年が公共図書館で読書をはじめ、「夢に描いた女性」では男女が待ち合わせをする。¹⁵²

ところで図書館は、人間のいるところには必ずあるというわけではないし、逆に、あったとしても必ず利用されるというわけでもない。図書館がない場合にはつくるということになる。

たとえばアルツイパーシェフの「サーニン」では、登場人物の女性が、自分は仲間と、労働者のための図書館をつくって運営しているといっている。¹⁵³チエホフの「中二階のある家」にも、民衆の生活改良の活動をしている女性が出ているが、この小説の主人公の画家は彼女に対して、診療所や学校や図書館は、現在の社会条件の下ではかえって民衆の「奴隷」化に役立つだけだと述べている。¹⁵⁴同じチエホフの「イオーヌイチ」¹⁵⁵と「私の生活」¹⁵⁶では、小説の舞台になっている市の図書館を利用するのは

図書館界

若い女性やユダヤ人の青年ぐらいであり、広範囲の人々には利用されていないという意味の文が出ている。しかし一方、やはりチエホフの戯曲「桜の園」には、読書施設がないという不満の言葉も出ている。⁵⁰⁾

読書ということでは、狭義の「図書館」からややずれるが、オスカー・ワイルドの戯曲「真面目が肝心」には、商業的会員制図書館・貸本屋のミュージーデー図書館が回ってくる小説本についての会話がある。⁵¹⁾貸本屋は明治以降の日本でも読書に関して忘れてならない存在だと思われるが、第2次世界大戦後の1950～60年代には一時は総数3万店ともいわれるほど民衆向け貸本屋が隆盛し、1956年(昭和31)には『図書館雑誌』でも2号にわたって特集がくまれました。⁵²⁾この第2次大戦後のもので、山口瞳の「江分利満氏の優雅な生活」の冒頭は、主人公の息子(小学生)が休日に、何度も貸本屋と家の間を往復して、漫画の単行本を借りて読むという場面で始まっている。⁵³⁾

以上みてきたように、図書館そのものや、読書という点で図書館に関連するいろいろな例が、文学作品のなかには見出すことができるわけである。

(以下、次々号に続く。)

注

- 1) 『図書館界』Vol. 39 No. 5 1988年1月 p.195-204
- 2) 『津田左右吉全集』別巻第2～第5, 岩波書店, 昭和41年。改訂版は「我が」が省かれて、「文学に現はれたる国民思想の研究」, 同全集第4～8巻, 昭和39年。
- 3) 岩波書店(岩波文庫)1984年
- 4) 取り上げ方等は原則として異なっているが、数だけからいうと本稿での作品数(随筆等をふくむ)のうち2～3割になる。(よく知られていたり、重要と思われるために加えたというものもある)。ただ、個々の文学作品等が、参考文献にあげる他の方の文献から知ったものかどうかを注記するのは、煩瑣になるので略させていただきますことにする。また、本稿は、文学に現われる図書館(員)関係の(筆者にわかる)全体の輪郭を述べたいと思うので、参考文献に書いた筆者のものとも、作品そのほかについて一部重複する部分がある。あわせておことわりしておく。
- 5) 新村出「図書館と文庫」を参照。『新村出全集』第4巻, 筑摩書房, 昭和46年, p.392-393。なお、以後、本文では文学作品名については「」で記し、注では単行書については「」にする。また本文中での引用では、改行を斜線に、省略を点線にする場合がある。
- 6) 松本健一『大川周明・百年の日本とアジア』作品社 1986年 p.390-393
- 7) J. アップダイク『美術館と女たち』所収 宮本陽吉訳

新潮社 1980年

- 8) 『田山花袋全集』第2巻所収, 文泉堂書店, 昭和48年。
なお、本文中ではこれ以後、作品等のジャンルが詩や戯曲の場合はそのことを記すが、題名にジャンルを付記しないものは小説か随筆である。
- 9) 『漱石全集』第8巻 岩波書店 昭和41年 p.197
- 10) 『斎藤茂吉全集』第11巻 岩波書店 昭和28年 p.504-505
- 11) 『サハラ放浪』旺文社(旺文社文庫)1981年 p.125
- 12) 『野上弥生子全集』第17巻 岩波書店 1980年 p.41
- 13) 同上 p.40-41
- 14) 同上全集第16巻, 1980年, p.471。念のために付記するが、引用部分の後半は諧謔である。
- 15) たとえば「倫敦時代の郡虎彦君」『水上瀧太郎全集』第9巻 岩波書店 昭和15年 p.628-646
- 16) 同上全集第6巻所収 昭和16年
- 17) 同上全集第2巻所収 昭和16年
- 18) 『日本詩人全集』12 新潮社 昭和44年 p.70
- 19) 「食卓の人々」『水上瀧太郎全集』第6巻 p.581-582
- 20) 「創作余話」6『北村夫全集月報』6(全集第4巻付録) 新潮社 昭和52年 p.2
- 21) 同上
- 22) 「自作解説」大原富枝『婉という女』新潮社(新潮文庫) 昭和38年 p.205-206
- 23) 「私の興福寺」大原富枝『菓立ち』毎日新聞社 昭和58年 p.229
- 24) 「アラスカ取材紀行」新田次郎『アラスカ物語』新潮社(新潮文庫) 昭和55年 p.384-385
- 25) 「ビルマの竖琴ができるまで」竹山道雄『ビルマの竖琴』新潮社(新潮文庫) 昭和48年改版 p.193
- 26) 後藤明生『吉野大夫』平凡社 1981年
- 27) 『鷗外全集』第16巻 岩波書店 昭和48年 p.261-268
- 28) 「二つのお守り」津島佑子『夜と朝の手紙』海竜社 昭和55年 p.191
- 29) たとえば石川啄木の一例で、彌吉光長「石川啄木の性格と読書の効果」には、啄木が大橋図書館で多くの本を読んだと日記に記したことがふれられている。『彌吉光長著作集』第2巻 日外アソシエーツ 1981年 p.240, 248
- 30) 「図書館」「デカダンの読書」は『菊池寛全集』第14巻, 中央公論社, 昭和13年, のp.470-472, 468-470。「半自叙伝」は『菊池寛文学全集』第8巻所収, 文藝春秋新社, 昭和35年。
- 31) 『菊池寛全集』第14巻 p.470
- 32) 『菊池寛文学全集』第3巻所収 昭和35年
- 33) 『菊池寛全集』第14巻 p.472
- 34) 日比谷図書館閉鎖問題に関してはたとえば、清水正三・是枝英子「戦時下東京で起こった閲覧者の日比谷図書館閉鎖反対運動」, 『みんなの図書館』, 136号, 1988年9月, p.52-63。

May 1989

- 35) 『菊池寛文学全集』第7巻 昭和35年 p.290
- 36) 『園研究』Vol.11 No.3 1938年 p.357-358
- 37) 『図書館雑誌』Vol.77 No.4 1983年4月 p.194-195
- 38) 『柏原兵三作品集』第7巻 潮出版社 昭和49年 p.192-194
- 39) 『木下杢太郎全集』第15巻 岩波書店 1982年 p.254-261
- 40) 吉屋信子『処女読本』健文社 昭和11年 p.113-119
- 41) 『宮本百合子全集』第17巻 新日本出版社 1981年 p.701-709
- 42) 『佐多稲子全集』第18巻 講談社 昭和54年 p.417
- 43) 『伊藤整全集』第23巻 新潮社 昭和49年 p.95-100
- 44) 同上全集第6巻 昭和47年 p.91-93, 125
- 45) 「本にまつわること」, 大庭みな子『醒めて見る夢』, 講談社, 昭和53年, p.349-352。「再会」, 『波』(新潮社発行), 1986年6月号, p.2-5。
- 46) 「文学的自叙伝」『林芙美子全集』第10巻 文泉堂出版 昭和52年 p.1, 6
- 47) 「私の青春時代」『宮本百合子全集』第17巻 新日本出版社 1981年 p.713
- 48) 「ゆれる葦」のなかの「仮入学生」『網野菊全集』第2巻 講談社 昭和44年 p.100-101
- 49) 「東京の三十年」のなかの「上野の図書館」『田山花袋全集』第15巻 文泉堂書店 昭和49年 p.488-491
- 50) 「青春の『上田敏詩抄』」新田次郎『小説に書かなかった話』光文社(光文社文庫)昭和63年 p.217-220
- 51) 赤川次郎『三毛猫ホームズの青春ノート』(岩波ブックレットNo.38) 岩波書店 1984年 p.16-17
- 52) 「北向きの窓から」のなかの「雨男」黒井千次『北向きの窓から』朝日新聞社 1987年 p.44
- 53) 「中学高校の頃」後藤明生『もう一つの目』文藝春秋 1988年 p.19
- 54) 「青春の始まりの日」『押し入れの中』, 宮本輝『二十歳の火影』, 講談社, 1980年, p.67, 71。「精神の金庫」, 宮本『命の器』, 講談社(講談社文庫), 昭和61年, p.49。また, 中之島図書館での読書は小説『星々の悲しみ』に取り入れられていることも書かれている。
- 55) 「本棚の宝物」津島佑子『私の時間』人文書院 1982年 p.67-68
- 56) 「探偵小説四十年」のなかの「アメリカ渡航の夢」『江戸川乱歩全集』第20巻 講談社 昭和54年 p.21
- 57) 「探偵小説四十年」のなかの「手製本「奇譚」」同上書 p.19
- 58) 「わが読書遍歴」『五木寛之エッセイ全集』第12巻(宛名のない手紙) 講談社 昭和55年 p.19
- 59) 「私の読書遍歴」『高橋和巳全集』第14巻 河出書房新社 1978年 p.275
- 60) 「私の読書遍歴」『花田清輝全集』第6巻 講談社 1978年 p.282
- 61) 「やぶれかぶれ青春記」小松左京『やぶれかぶれ青春記』旺文社(旺文社文庫)1986年(重版) p.146
- 62) 『テネシー・ウィリアムズ回想録』鳴海四郎訳 白水社 1978年 p.77
- 63) 『シートン自叙伝』, 内山賢次訳, 白揚社, 昭和16年, p.250-257。戸川幸夫『シートンのかかげた灯』, 旺文社(旺文社文庫), 1983年, p.64-71。
- 64) ランボー自身の文でなく, 清水邦夫「〈図書館〉とランボー」による。清水『ほほえみよ, 流し目の偽彩よ』レクラム社 昭和54年 p.106
- 65) 『大英博物館が倒れる』高儀進訳 白水社 1982年 p.79-81
- 66) 『群像』第35巻7号, 昭和55年7月, p.266-267。または, 『図書館雑誌』Vol.74 No.10, 1980年10月, p.534-535。
- 67) 井上ひさし『本の枕草紙』文藝春秋 昭和57年 p.104-109
- 68) 樋田満文編『東京文学地名辞典』東京堂出版 昭和53年 p.9
- 69) 『庄野潤三全集』第10巻 講談社 昭和49年 p.397
- 70) 「南風北風」の項目の1つ。『梅崎春生全集』第7巻 新潮社 昭和48年 p.291-292
- 71) 『不思議図書館』, 1981年。『幻想図書館』, 1982年。ともにPHP研究所。
- 72) 『世界文学全集』第28巻所収 三井光彌訳 新潮社 昭和3年 p.19-20
- 73) 『現代日本文学大系』91 筑摩書房 昭和48年 p.428-434
- 74) 『日の移ろい』, 昭和51年。『続・日の移ろい』, 昭和61年。ともに中央公論社。
- 75) 「アイデアの誕生」(講演要旨) 『大学の図書館』第6巻9号 1987年9月 p.143
- 76) 「文学的自伝」『葉山嘉樹全集』第5巻 筑摩書房 昭和51年 p.170
- 77) フレデリック・デュラン『北欧文学史』毛利三彌・尾崎和郎・共訳 白水社 1977年 p.73
- 78) 明治30年4月23日付『漱石全集』第14巻 岩波書店 昭和41年 p.100
- 79) 『娘時代』朝吹登水子訳 紀伊国屋書店 1961年 p.145-146
- 80) 「初めての愛の告白」林真理子『夢みるころを過ぎて』角川書店(角川文庫)昭和61年 p.50-51
- 81) 『ユリアと魔法の都』筑摩書房 1980年(新装版)
- 82) 『阿部知二全集』第4巻所収 河出書房新社 1974年
- 83) 『田山花袋全集』第1巻 文泉堂書店 昭和48年 p.578
- 84) 『漱石全集』第4巻所収 岩波書店 昭和41年
- 85) 同上書 p.45
- 86) 『芥川龍之介全集』第3巻所収 岩波書店 1977年 p.

93-99

- 87) 『学生時代』旺文社(旺文社文庫)1981年 p. 256
 88) 同上書 p. 93
 89) 『芥川龍之介全集』第7巻所収 岩波書店 1978年 p. 187
 90) 『新しい人よ眼ざめよ』講談社 1983年
 91) 同上書 p. 39
 92) 『野上弥生子全集』第9巻 岩波書店 1981年 p. 6
 93) 『現代日本文学大系』91 筑摩書房 昭和48年 p. 428-434
 94) 『三島由紀夫全集』第4巻所収 新潮社 昭和49年 図書館の部分はp. 445-461
 95) 西村正守「帝国図書館出納略史」『図書館研究シリーズ』(国立国会図書館) No. 17 昭和51年 p. 3
 96) 『前田夕暮全集』第1巻 角川書店 昭和47年 p. 79
 97) 『日本詩人全集』12 新潮社 昭和44年 p. 70
 98) 『菊池寛文学全集』第3巻所収 文藝春秋新社 昭和35年
 99) 『現代日本名詩集大成』8 創元社 昭和35年 p. 278
 100) 同上書 p. 277
 101) 『校本・宮澤賢治全集』第11巻 筑摩書房 昭和49年 p. 277-278
 102) 「[われはダルケを名乗れるものと]」, 同上全集第5巻, 昭和49年, p. 281。「ダルケ」, 同前第6巻, 昭和51年, p. 437-438。
 103) 『朝日新聞』(東京)1988年 8月5日夕刊
 104) 『現代日本名詩集大成』8 創元社 昭和35年 p. 248
 105) 『日夏耿之介全集』第1巻 河出書房新社 1973年 p. 160-169
 106) 『草野心平全集』第1巻 筑摩書房 昭和53年 p. 388-389
 107) 『小熊秀雄全集』第4巻 創樹社 1977年 p. 156
 108) 『萩原朔太郎全集』第2巻 新潮社 昭和34年 p. 95-96
 109) 『現代詩手帖』第24巻11号 1981年11月 p. 40-43
 110) 同上 p. 66-69
 111) 『現代日本名詩集大成』9 創元社 昭和36年 p. 60
 112) 『ユリアと魔法の都』筑摩書房 1980年(新装版)
 113) 『光車よ, まわれ!』筑摩書房(ちくま文庫)1987年
 114) 『アナトール・フランス長篇小説全集』第15巻 川口篤訳 白水社 1951年
 115) ボルヘス「伝奇集」のなかの1篇。篠田一士訳『世界の文学』第9巻所収 集英社 1978年
 116) 『中島敦全集』第1巻所収 筑摩書房 昭和51年
 117) E. ネスピット『緑の国のわらい鳥』所収 猪熊葉子訳 大日本図書 1968年
 118) 『リリス』荒俣宏訳 筑摩書房(ちくま文庫)1986年
 119) 村上春樹『カンガルー日和』所収, 平凡社, 1983年。
 なお, 村上春樹の小説のなかの図書館(的なもの)について

- て, 高橋丁未子『羊のレストラン・村上春樹の食卓』に, 「図書館」という項目がある(CBSソニー出版, 1986年, p. 107-110)。
 120) 『洪水のあと』山下泰文訳 岩波書店 1986年
 121) 『九十三年』3冊, 辻利訳, 岩波書店(岩波文庫), 昭和29-39年。『九十三年』2冊, 柳原晃三訳, 潮出版社(潮文庫), 昭和44-45年。この挿話については, 清水徹「書物の形而下学と形而上学」を参照(清水『書物の夢・夢の書物』, 筑摩書房, 1984年, p. 259-299, または, 叢書・文化の現在 10『書物・世界の陰喩』, 岩波書店, 1981年, p. 139-182)。
 122) 『僕って何』河出書房新社 昭和52年 p. 3
 123) 『芥川龍之介全集』第1巻 岩波書店 1977年 p. 162
 124) 『団地小学校』新潮社 昭和48年 p. 85-87
 125) 『大英博物館が倒れる』高儀進訳 白水社 1982年
 126) 『高見順全集』第8巻所収 勁草書房 昭和45年
 127) 『星々の悲しみ』所収 文藝春秋 昭和56年
 128) 『谷崎潤一郎全集』第4巻所収 中央公論社 昭和42年
 129) バディ・キッチン『詩人たちのロンドン』早乙女忠訳 朝日イブニングニュース社 1983年 p. 195-196
 130) 『火の娘たち』所収, 篠田知和基訳, 思潮社, 1987年。『ネルヴァル全集』第2巻所収, 入沢康夫訳, 筑摩書房, 1975年。
 131) 『北杜夫全集』第4巻 新潮社 1977年 p. 579-580
 132) 『石川達三作品集』第15巻所収 新潮社 昭和47年
 133) アーウィン・ショー『小さな土曜日』所収 小泉喜美子訳 早川書房(ハヤカワ文庫)昭和60年
 134) 『誘惑者』講談社 1976年 p. 26-27
 135) 『宇野浩二全集』第1巻 中央公論社 昭和47年 p. 63
 136) 『ジャック・ロンドン自伝的物語』辻井栄滋訳 晶文社 1986年
 137) 『世界の文学』第6巻所収 河野一郎訳 集英社 1976年 p. 146-150
 138) 『世界文学全集』第2集第13巻 丸谷才一ほか訳 河出書房新社 昭和39年 p. 230-274
 139) 『世界文学全集』第98巻所収 白井浩司訳 講談社 1975年
 140) 『ティファニーで朝食を』所収 龍口直太郎訳 新潮社(新潮文庫)昭和43年 p. 75-77
 141) 『アシスタント』加島祥造訳 新潮社(新潮文庫)昭和47年
 142) 『時計じかけのオレンジ』乾信一郎訳 早川書房(ハヤカワ文庫)昭和52年 p. 205-211
 143) 『ドクトル・ジバゴ 第2部』江川卓訳 時事通信社 昭和55年 p. 61-69
 144) 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮社 1985年
 145) 『永井龍男全集』第8巻 講談社 昭和56年 p. 266

May 1989

研究会報告

- 146) 『芥川賞全集』第4巻所収 文藝春秋 昭和57年
1939年改版 p. 61
- 147) 『鷗外全集』第8巻 岩波書店 昭和47年 p. 212,
206
- 148) 『露伴全集』第4巻 岩波書店 昭和28年 p. 384
- 149) 『松本清張全集』第35巻 文藝春秋 1972年 p. 7,
34
- 150) 塚原健二郎『子ども図書館』所収 中央公論社 昭和
14年
- 151) 落合聡三郎『学級図書館』所収, 清水書店, 昭和15年。
落合『学級図書館』所収, 富貴書店, 昭和24年。
- 152) とともに『マラマッド短篇集』所収 加島祥造訳 新潮
社(新潮文庫) 昭和46年
- 153) 『サーニン』上巻 中村白葉訳 岩波書店(岩波文庫)
- 154) 『チェーホフ全集』第10巻 原卓也訳 中央公論社
昭和44年 p. 298
- 155) 同上全集第11巻 神西清訳 昭和43年 p. 108
- 156) 「わが人生」同上全集第10巻 原卓也訳 昭和44年
p. 326
- 157) 同上全集第12巻 神西清訳 昭和43年 p. 377
- 158) 『オスカー・ワイルド全集』第4巻所収 鳴海四郎訳
出帆社 1976年 p. 395
- 159) 第50巻5, 6号 1956年5, 6月
- 160) 『江分利満氏の優雅な生活』文藝春秋 昭和38年 p.
7-8